

処方秘箋

泉鏡花

青空文庫

此の不思議なことのあつたのは五月中旬、私が八歳の時、紙谷町に住んだ向うの平家の、お辻といふ、十八の娘、やもめの母親と二人ぐらし。少しある公債を便りに、人仕事などをしたのであるが、つゞまやかにして、物綺麗に住んで、お辻も身だしなみ好き、髪形を崩さず、容色は町々の評判、以前五百石取の武家、然るべき品もあつた、其家へ泊りに行つた晩の出来事で。家も向ひ合せのことなり、鬼ごっこにも、碇はじきにも、其家の門口、出窓の前は、何時でも小児の寄合ふ処。次郎だの、源だの、六だの、腕白どもの多い中に、坊ちゃんくと別ものにして可愛がるから、姉はなし、此方からも懐いて、ちよこくと入つては、縫物を交返す、物差で刀の真似、馴っこになつて親んで居たけれども、泊るのは其夜が最初。

西の方に山の見ゆる町の、上の方へ遊びに行つて居たが、約束を忘れなかつたから晩方に引返した。之から夕餉を済してといふつもり。

小走りに駆けて来ると、道のほど一町足らず、屋ならば三十ばかり、其の山手の方に一

軒の古家がある、丁ど其処で、兎のやうに芻ねたはずみに、礫に躓いて礎と倒れたのである。

俗にいふ越後は八百八後家、お辻が許も女ぐらし、又海手の二階屋も男気なし、棗の樹のある内も、男が出入をするばかりで、年増は蚊帳が好だといふ、紙谷町一町の間、四軒、いづれも夫なしで、就中今転んだのは、勝手の知れない怪しげな婦人の薬屋であつた。

何処も同一、雪国の薄暗い屋造であるのに、廂を長く出した奥深く、煤けた柱に一枚懸けたのが、薬の看板で、雨にも風にも曝された上、古び切つて、虫ばんで、何といふ銘だか誰も知つたものはない。藍を入れた字のあとは、断々になつて、恰も青い蛇が、渦き立つ雲がくれに、昇天をする如く也。

別に、風邪薬を一貼、凍傷の膏薬一具買ひに行つた話は聞かぬが、春の曙、秋の暮、夕顔の咲けるほど、炉の楣の消ゆる時、夜中にフト目の覚むる折など、町中を籠めて芬々と香ふ、湿ほい風は薬屋の氣勢なので。恐らく我国の薬種で無からう、天竺伝来か、蘭方か、近くは朝鮮、琉球あたりの妙薬に相違ない。然う謂へば彼の房々とある髪は、なんと、物語にこそ謂へ目前、解いたら裾に靡くであらう。常に

それを、束ね髪たばがみにしてカツシしろがねんざしと銀の簪ぎんざし一本、濃く且つ艶かつややかに堆うずたかい鬢かびんの中なかから、差さ覗しのぞく鼻はなの高たかさ、頬ほおの肉にくしまつて色は雪のやうなのが、眉まゆを払はらつて、年とし紀ぎの頃ころも定さだかならず、十年も昔むかしから今いまにかはらぬといふのである。

内の様子も分らないから、何となく薄気味うすきみが悪いので、小兒こどもの気きにも、暮くれ方がたには前まへを通とほるさへ駆かけ出すばかりにする。真昼まっぴるま間、向むかう側がわから密そつと透すかして見みると、窓まども襖ふすまも閉しめ切きつて、空屋すそひろに等おなしい暗くらい中に、破風はふの隙ひまから、板目いための節ふしから、差さ入いる日ひの光ひとすじ一筋ふたすじ、一筋ふたすじ、裾すそ広ひろがりにはつと明あかるく、得えも知しれぬ塵ちりほこり埃あいだのむら／＼と立たつ間まを、兎ともすればひら／＼と姿すがたの見える、婦人おんなの影かげ。

転ころんで手てをつくと、はや薬くすりの匂においがして膚はだえを襲おそつた。此こゝの一いっ町ちやうがかりは、軒のきも柱はしらも土つちも石いしも、残のこらず一いっ種しゆの香かに染しんで居ゐる。

身みに痛いたみも覚おぼえぬのに、場所ばしょもこそあれ、此こゝ処こゝはと思おもふと、怪あやしいものに捕とらへられた氣きがして、わつと泣なき出した。

「あれ危い。」と、忽ち手を伸べて肩をつかまへたのは彼の婦人で。

其の黒髪の中の大理石のやうな顔を見ると、小さな者はハヤ震へ上つて、振撈らうとして身をあせつて、仔雀の羽うつ風情。

怪しいものでも声は優しく、

「おゝ、膝が擦剥けました、薬をつけて上げませう。」と左手には何うして用意をしたらう、既に薫の高いのを持つて居た。

守宮の血で二の腕に極印をつけられるまでも、膝に此の薬を塗られて何うしよう。

「厭だ、厭だ。」と、しやにむに身悶して、声高になると、

「強情だねえ、」といつたが、漸と手を放し、其のまゝ駆出さうとする耳の底へ、

「今夜、お辻さんの処へ泊りに行くね。」

といふ一聯の言を刻んだのを、……今に到つて忘れない。

内へ帰ると早速、夕餉を済し、一寸着換へ、糸、犬、錨、などを書いた、読本を一冊、草紙のやうに引提げて、母様に、帯の結目を丁と叩かれると、直に戸外へ。

海から颯と吹く風に、本のペエジを乱しながら、例のちよこく、をばさん、辻ちやんと呼びざまに、からりと開けて飛込んだ。

ひとしごといそがわ
人仕事に忙しい家の、晩飯の支度は遅く、丁ど御膳。取附の障子を開けると、洋燈
の灯も朦朧とするばかり、食物の湯気が立つ。

冬でも夏でも、暑い汁の好だつたお辻の母親は、むんむと気の昇る腕を持ったまゝ、ほ
てつた顔をして、

「おや、おいで。」

「大層おもたせぶりね、」とお辻は箸箱をがちやりと云はせる。

母親もやがて茶碗の中で、さら〜と洗つて塗箸を差置いた。

手で片頬をおさへて、打傾いて小楊枝をつかひながら、皿小鉢を寄せるお辻を見
て、

「あしたにすると可いやね、勝手へ行つてたら坊ちゃんか淋しからう、私は直に出懸ける
から。」

「然うねえ。」

「可いよ、可いよ、構やしないや、独で遊んでら。」と無雑作に、小さな足で大胡坐に
なる。

「ぢや、まあ、お出懸けなさいまし。」

「大人おとなしいね。感心かんしん、」と頭あたまを撫なでる手てつきをして、

「どれ、其それでは、」楊枝ようじを棄すてると、やつとこき、と立ち上あつた。

お辻つじが膳ぜんを下くだげる内に、母親ははは次の仏間ぶつまで着換きかへる様子ようす、其そこ処こに筆筒たんすやら、鏡台きやうだいやら。
最も一ひとツ六畳むつじやうが別わかに戸外おもてに向むかいて居ゐて、明あかり取とりが皆みなで三間げんなり。

母親はははやがて、繻子しゆすの帯おびを、前結まへむすびにして、風呂敷ふうろしき包つつみを持もつて頭あられた。お辻つじの大柄おほびらな背せのすらりとしたのとは違ちがひ、丈たけも至いたつて低ひかく、顔かお容かたちも小造こづくりな人ひとで、髪かみも小こさく結ゆつて居ゐた。

「それでは、お辻つじや。」

「あい、」と、がちやくいはせて居ゐた、彼方かなたの勝手かたで返事たすきをし、襷たすきがけのまゝ、駆かけて来きて、

「氣きをつけて行いらつしやいませよ。」

「坊ぼちゃん、緩ゆり遊あんでやつて下さい。直ただぐ寝ねつちまつちやあいけませんよ、何どうも御苦ご勞らう様さまなことツたら、」

とあとに独ひとり言ごと、框かまちに腰こしをかけて、足あしを突出つくだすやうにして下駄げたを穿はき、上おへ蔽おかぶさつて、沓脱越くつぬぎこしに此方こちらから戸かどをあけるお辻つじの脇わきあけの下したあたりから、つむりを出だして、ひ

よこくと出て行つた。渠は些と遠方をかけて、遠縁のもの通夜に詣つたのである。其がために女が一人だからと、私を泊めたのであつた。

三

枕に就いたのは、良ほど過ぎて、私の家の職人衆が平時の湯から帰る時分。三人づれで、声高にものを言つて、笑ひながら入つた、何うした、などと言ふのが手に取るやうに聞えたが、又笑聲がして、其から寂然。

戸外の方は騒がしい、仏間の方を、とお辻はいつたけれども其方を枕にすると、枕頭の障子一重を隔てて、中庭といふではないが一坪ばかりのしづくひ叩の泉水があつて、空は同一ほど長方形に屋根を抜いてあるので、雨も雪も降込むし、水が溜つて濡れて居るのに、以前女髪結が住んで居て、取散かした元結が化つたといふ、足巻と名づける針金に似た黒い蚯蚓が多いから、心持が悪くつて、故と外を枕にして、並んで寝たが、最う夏の初めなり、私には清らかに小搔巻。

寝る時、着換へて、と謂つて、女の浴衣と、紅い扱帯をくれたけれども、角兵衛獅子の

母衣ほろではなし、母おつかさん様のいひつけ通り、帯をメ《し》めたまゝで横になつた。

お辻は寒むすめさをする女で、夜具やぐを深く被かけたのである。

唯と顔を見合おもいだせたが、お辻は思おもいだ出したやうに、莞爾にっこりして、

「さつき、駆出かけだして来て、薬屋の前でころんだのね、大おおきなりな形をして、をかしかつたよ。」

「呀や、復また見て居たの、」と私は思はず。……

これは此の春頃から、其まで人の出で入はいりさへ余りなかつた上かみの薬屋が方かたへ、一人にんの美少年

が来て一いつしよ所に居る、女主人おんなあるじの甥おいださうで、信濃しなののもの、継母ままははに苛いじめられて家出をし

て、越後おぼなる叔母たよを使たよつたのだと謂いふ。

此のほどから黄昏たそがれに、お辻が屋根へ出て、廂ひさしから山手やまての方ほうを覗のぞくことが、大抵ひごと日毎、

其は二階の窓から私も見た。

一体裏ほしものに空地はなし、干物ほしものは屋根でする、板葺いたぶきの平屋造ひらやづくりで、お辻の家は、其真そのまん

中なか、泉水ところのある処ところから、二間梯子にけんばしこを懸かけてあるので、悪戯いたずらをするなら小児こどもでも上あがり下おり

は自由な位、干物に不思議はないが、待まちて、お辻の屋根へ出るのは、手拭てぬぐい一筋棹ひとすじさおに

懸かつて居る時には限らない、恰あたかも山の裾すそへかけて紙谷町しやまは、だら〜のぼり、斜かために高い

から一目に見える、薬屋の美少年をお辻が透見すきみをするのだと、内の職人ことばどもが言ことばを、小耳こみみ

にして居るさへあるに、先刻さつぎ転んだことを、目のあたり知つて居るも道理こそ。

「呀、復また見て居たの……といったは其の所為せいで、私は何の気もなかつたのであるが、之これを聞くと、目をぼつちりあげたが顔を赧あからめ、

「厭いやな！」といつて、口許くちもとまで天鷲絨びろうとの襟えりを引かぶつた。

「そして転んだのを知つてるの、をかしいな、辻ちゃんつうは転んだのを知つてるし、彼あのをばさんは、私の泊るのを知つて居たよ、皆知みんなつて居ら、をかしいな。」

四

「え！」と慌あわただしく顔を出して、まともに向直むきなつて、じつと見て、

「今夜泊ることを知つて居ました？」

「あゝ、整ちゃんと然そう言つたんだもの。」

お辻は美しい眉まゆを顰ひそめた。燈火ともしびの影暗く、其の顔寂さみしう、

「恐おそろしい人だこと、」といひかけて、再び面おもてを背そむけると、又深々ふかふかと夜具やぐをかけた。

「辻ちゃん。」

「……………」
 「辻ちゃんてば、」

「……………」
 「よう。」

こんな約束ではなかつたのである、俊徳丸の物語のつゞき、それから手拭を藪へ引いて行つた、踊をする三といふ猫の話、それもこれも寝てからといふのであつたに、詰らない、寂しい、心細い、私は帰らうと思つた。丁ど其時、どんと戸を引いて、かたりと鎖をさした我家の響。

胸が轟いて搔巻の中で足をばたくした、堪らなくツて、くるりとはらばひになつた。目を開いて耳を澄すと、物音は聞えないで、却て戸外なる町が歴然と胸に描かれた、暗である。駆けて出て我家の門へ飛着いて、と思ふに、夜も慙う更けて、他人の家からは勝手が分らず、考ふれば、毎夜寐つきに聞く職人が湯から帰る蹠音も、向うと此方、音にも裏表があるか、様子も違つて居た。世界が變つたほど情なくなつて、枕頭に下した戸外から隔ての葎が、厚さ十万里を以て我を困ふが如く、身動きも出来ないやうに覺えたから、これで殺されるのか知らと涙ぐんだのである。

ものの懸念さに、母様をはじめ、重吉も、嘉蔵も呼立てる声も揚げられず、呼吸さへ高くしてはならない気がした。

密と見れば、お辻はすや／＼と糸が揺れるやうに幽な寐息。

これも何者かに命ぜられて然かく寐入つて居るらしい、起してはならないやうに思はれ、ア、復横になつて、足を屈めて、目を塞いだ。

けれども今しがた、お辻が（恐しい人だこと、）といった時、其の顔色とともに灯が恐しく暗くなつたが、消えはしないだらうかと、いきなり電でもするかの如く、恐る／＼目をあけて見ると、最う真暗、灯はいつの間にか消えて居る。

はツと驚いて我ながら、自分の膚に手を触れて、心臓をしつかと圧へた折から、芬々として薫つたのは、橘の音信か、あらず、仏壇の香の名残か、あらず、ともすれば風につれて、随所、紙谷町を渡り来る一種の葉の匂であつた。

しかも梅の影がさして、窓がぼつと明るなる時、縁に蚊遣の靡く時、折に触れた今までに、つい其夜の如く香の高かつた事はないのである。

瓶か、壺か、其の葉が宛然枕許にでもあるやうなので、余の事に再び目をあけると、暗の中に二枚の障子。件の泉水を隔てて寢床の裾に立つて居るのが、一間真蒼

になつて、棧さんも数へらるゝばかり、黒みを帯びた、動かぬ、どんよりした光がさして居た。
 見るく裡うちに、べらくと紙が剥はげ、棧が吹ふツ消けされたやうに、ありのまゝで、障子が
 失うせると、羽目はめの破やぶれ目にまで其の光が染しみ込んだ、一坪の泉水うしろを後に、立たち 踰あれた婦お
 人の姿んな。

解とき余びんうすたかる鬢びんうすたかの堆かいの中に、端然まむきとして真向またたの、瞬またたきもしない鋭い顔は、正ましく薬屋あるじの主婦
 である。

唯と見る時、頬ほを蔽おほへる髪おほのさきに、ゆらくと波立なみだつたが、そよりともせぬ、裸はだ 蠟だろうそ
 燭くの蒼あおい光を放つのを、左ゆんで手に取つてするくくと。

五

其もすその裳ふの触ふるゝばかり、すつくと枕許つったに突つ立つた、私は貝なまめを磨なまいたやうな、足の指くまを寝
 ながらいき呼吸いを殺きした、顔つめとも冷つめとうなるまでに、室まの内くまを隈くまなく濁なまつた水晶なまめに化なし了なする
 のは蠟燭なまめの鬼火なまめである。鋭なまめい、しかし媚なまめいた声なまめして、
 「腕わんぱく白さつき、先刻さつきはよく人の深しんせつ切しんせつを無なにしたね。」

私は石になるだらうと思つて、一思に窘んだのである。

「したが私の深切を受ければ、此の女に不深切になる処。感心にお前、母様に結んで頂いた帯を《し》めたまゝ寝てること、腕白もの、おい腕白もの、目をぱちくりして寝て居るよ。」といつて、ふふんと鷹揚に笑つた。姐御真実だ、最う堪らぬ。

途端に人膚の氣勢がしたので、咽喉を噛れたらうと思つたが、然うではなく、蠟燭が敷蒲団の端と端、お辻と並んで合せ目の、畳の上に置いてあつた。而して婦人は膝をついて、のしかゝるやうにして、鬢の間から真白な鼻で、お辻の寐顔の半夜具を引かついで膨らんだ前髪の、眉のかゝり目のふちの稍曇つて見えるのを、じつと覗込んで居るのである。おゝ、あはれ、小やかに慎ましい寐姿は、藻脱の殻か、山に夢がさまよふなら、衝戻す鐘も聞えよ、と念じ危ぶむ程こそありけれ。

婦人は右手を差伸して、結立の一筋も乱れない、お辻の高島田を無手と掴んで、づつと立つた。手荒さ、烈しさ。元結は切れたから、髪の毛のずるりと解けたのが、手の甲に絡はると、宙に釣されるやうになつて、お辻は半身、胸もあらはに、引起されたが、両手を畳に裏返して、呼吸のあるものとは見えない。

爾時、右手に黒髪を搦んだなり、

「人もあらうに私の男に懸想した。さあ、何うするか、よく御覧。」

左手の肱を鍵形に曲げて、衝と目よりも高く差上げた、掌に、細長い、青い、小さな瓶あり、捧げて、俯向いて、額に押当て、

「呪詛の杉より流れし雫よ、いざ汝の誓を忘れず、目のあたり、験を見せよ、然らば、」
と言つて、取直して、お辻の髪の毛に口を望ませ、

「あの美少年と、容色も一對と心 上つた淫奔女、いでく女の玉の緒は、黒髪とともに切れよかし。」

と恰も宣告するが如くに言つて、傾けると、颯とかゝつて、千筋の紅溢れて、糸を引いて、ねばくと染むと思ふと、丈なる髪はほつりと切れて、お辻は崩れるやうに、寢床の上、枕をはづして土気色の頬を蒲団に埋めた。

玉の緒か、然らば玉の緒は、長く婦人の手に奪はれて、活きたる如く提げられたのである。

莞爾として朱の唇の、裂けるかと片頬笑み、

「腕白、膝へ薬をことづかつてくれれば、私が来るまでもなく、此の女は殺せたものを、夜が明けるまで黙つて寐なよ。」といひすてにして、細腰楚々たる後姿、肩を揺つ

て、束ね髷がざわ／＼と動いたと見ると、障子の外。

蒼い光は浅葱幕を払つたやうに颯と消えて、襖も壁も旧の通り、燈が薄暗く点いて居た。

同時に、戸外を山手の方へ、からこん／＼と引摺つて行く婦人の跫音、私はお辻の亡骸を見まいとして搔卷を被つたが、案外かな。

抱起されると眩いばかりの昼であつた。母親も歸つて居た。抱起したのは昨夜のお辻で、高島田も其まゝ、早や朝の化粧もしたか、水の垂る美しさ。呆氣に取られて目も放さないで目詰めて居ると、雪にも紛ふ頸を差つけ、くつきりした鬚の根を見せると、白粉の薫、櫛の齒も透過つて、

「島田がお好かい、」と唯あでやかなものであつた。私は家に歸つて後も、疑は今に解けぬ。

お辻は十九で、敢て不思議はなく、煩つて若死をした、其の黒髪を切つたのを、私は見て悚然としたけれども、其は仏教を信ずる国の習慣であるさうな。

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成1 泉鏡花」国書刊行会

1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行

1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行

底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店

1940（昭和15）年発行

初出：「天地人」

1901（明治34）年1月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

虬方秘箋

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>